中小工業資本家の「社会的性格」に関しての覚書（一）

中内清人

はじめに
一、零細工業者の社会的性格（以上本号）
二、中小工業資本家の社会的性格
むすび

はじめに

中小工業問題が独占資本主義において発生したという主張は広く認められている。[1] そして日本においては明治末年に、在来工業問題（小工業問題）は中小工業問題へと転化し、政府が最初に中小工業として分類したのは明治四四年といわれる。[2] 日本において中小工業問題は明治末期から問題として認識されるに至ったとされる。

この中小工業問題発生の原因が、独占資本による中小工業資本の収奪にあるということも、多くの研究者によって主張されている。

たとえば「中小企業こそ、その下積み層として最もきびしい収奪、いわゆる『しわよせ』をうけるところの、しかも尨大な層であり、独占資本と非独占との基本矛盾が、中小企業問題に最も集中的に現われているといえよう」[3]とされ、また「独占資本主義における独占利潤の基本的源泉が中小企業からの支配・収奪にねざすところに、中小企業問題の基本的部分が形成される。すなわち、中小企業問題は、独占資本主義の経済法則――独占利潤の法則が貫徹する過程で必然的に発生する矛盾である。それは独占利潤の法則の貫徹の主要形態である」[4]とされている。

中小工業問題発生の原因を独占資本による収奪に求める限り、この問題の究極的解決には独占資本の除去、ひいては資本主義体制の場棄が必要であることはいうまでもない。この点についても多くの論者によって指摘がなされている。

たとえば「中小企業問題は、本質的には、資本対労働という基本的矛盾の独占段階における特殊な存在形態なのである。……

われわれは、中小企業論において、中小企業問題を資本主義の根本的法則である『剰余価値の法則』と『資本蓄積の一般法則（労働者階級の窮乏化および反抗の法則）』の独占段階における貫徹形態として把握しなければならない[5]」とされるのは、中小企業問題の把握は資本対労働の矛盾の解決、即ち体制変革の一環として把握すべきだという主旨と思える。さて以上の如く中小工業問題の本質と、その解決方法を考えるならば、当然資本と労働、特に中小工業における資本と労働との、中小工業問題解決において占める役割の解明が重要となる。

これに関しては「基本的には、中小企業労働者の組織化こそ最も重要なものであること、そして、これと中小企業の組織とが、正しい関係におかれたとき、はじめて中小企業問題解決の道が開かれる[6]」とされている。すなわち、中

小工業問題の解決には、中小工業労働者の組織化、中小工業経営者の組織、そして、この両者の間での「正しい関係」の確立が必須の要因であるとされている。

また「中小企業労働者の生産する剰余価値が社会的に再配分され、その究極の収奪者が独占資本であるということから、労働者階級を基礎に中小零細企業各階層の独自性のある運動と結合して、問題性の解決を考えることが必要となってくる」[7]とされ、剰余価値を生産している労働者階級が問題解決の基礎であること、および中小工業資本家や零細工業者等の運動と、労働者階級の運動との結合の重要性が指摘されている。

本稿では、中小工業資本家の社会的・階級的性格を論究している諸説を、右の如き主張との関連で進め考察して行きたい。

(1) 伊東岱吉『中小企業論』、一五ページ、一九五七年、日本評論新社。
藤田敬三・竹内正巳『中小企業論』、二ページ、一九六八年、有斐閣。
(2) 由井常彦『中小企業政策の史的研究』、五六ページ、一九六四年、東洋経済新報社。
(3) 伊東岱吉、前掲、四二ページ。
(4) 平田喜久雄「反独占の論理――中小企業者運動の基盤――」(福岡大学『経済学論叢』第一九巻第二・三号)、一七四ページ。
(5) 平田喜久雄「中小企業論の課題と方法」(大阪経済大学中小企業研究所『中小企業季報』)
(6) 伊東岱吉、前掲著、一五一ページ。
(7) 巽　信晴・佐藤芳雄編『中小企業論を学ぶ』、一九七六年、有斐閣、九ページ。

一　零細工業者の社会的性格

レーニンと山口氏とによってなされている零細工業者（小ブルジョアジー）に関する主張を対比して課題を考察しよう。

レーニンは小ブルジョアを「商品経済の制度のもとで経営をおこなっている小生産者――これが『小ブルジョア』(Kleinbürgar) あるいは同じことであるが町人の概念を構成する簡単な標識である」と規定している。[8]

レーニンのこの「簡単な標識」が小ブルジョアの社会的・階級的性格を規定する最も基本的な標識である。

またレーニンはより具体的には次の如く規定している。小ブルジョアの生産関係の特徴（同時にその生産規模を規定する）は、経営主及びその家族員が仕事に従事することにある。[9] しかし、小ブルジョアジーは「往々自分でも労働者を搾取している」[10]のである。しかも「賃銀労働者のもっとも恥しらずな、欲の深い搾取者である」[11]。しかし、「賃労働の使用は、小ブルジョアという概念にとってかならず必要な標識であるわけではない」[12]としている。以上がレーニンによる小ブルジョアジーの基本的な規定である。[註] 労働者を搾取している中小工業資本家とは異る階級である。

（註）このような規定による小ブルジョアは、マルクスが「小資本家」として規定した生産者と部分的に合致する。

マルクスはつぎのように言っている。

「小資本家たちのばあいにはより多くまだ自己労働が行われている……。資本家の労働は、一般に、彼の資本の大きさに、すなわち彼を資本家であることにする力能に、反比例する」（K・マルクス『剰余価値学説史』Ⅲ、邦訳、四〇六ページ、大月書店版。

「小資本では、すなわちただ名目的に資本主義的生産が行われるだけの場合……自分の労働をほとんど自分で行なう小資本

家……」(同、四六四ページ)

「彼等(=小資本家たち——引用者)の場合にはまだ自己労働が一つの役割を演ずる……。資本家の労働は、総じて、彼の資本の大いさに、すなわち彼が資本家たる程度に逆比例する」(K・マルクス『資本論』、第三部、長谷部文雄訳、三五八ページ。青木書店版)。

「同職組合の多くの小親方や、さらに多くの自立的小手工業者とか、また賃労働者さえもが、小資本家に転化し、それから、賃労働の搾取の漸次的拡大およびそれに照応する蓄積によって、文句なしの資本家に転化した」(同、第一部、一一四三ページ)。

また、次の分割地農民についての規定も、「小資本家」をさきのように規定して述べたものである。「分割地農民にとっての搾取の制限として現象するのは、一方では、彼が小資本家たるかぎりでは資本の平均利潤ではなく、また他方では、彼が土地所有者たるかぎりでは地代の必要ではない。小資本家としての彼にとっての絶対的制限として現象するのは、本来的費用を控除したのち彼が自分自身に支払う労賃に他ならない」(同、第三部、一一三四—五ページ)。

尚、この家族労働力中心の小規模経営は、絶えざる生産力の発達を要求される資本主義の下では、分解を強制される「過渡的階級」である。だが他方で絶えず、新しく創出される傾向にある。

次に小ブルジョアジーの社会的・階級的性格に関連して積極的な主張をして居られる、山口良行氏の規定をみておこう。

山口氏は零細経営、中小企業、非独占大企業等の指標を次の如くしておられる。まず中小企業の下限、すなわち零細経営と中小企業との相違点を画定されるにあたり、自家労働力に基礎をおく経営を零細経営とし、雇用労働力に基礎をおく経営を中小企業としておられる。そして、従業者四人と五人との間にその境をおいておられる。[13] この点に関しては『東京都の中小企業と労働者』も、「従業者四〜五人規模になると、他人の雇用労働が加わってきて、経営の所得も統計の平均的な数値からみれば上昇するが、なお家族労働が中心であり、その所得水準からみても小ブル的レベルにとどまる」[14]としている。なお、同書は、「生業」(なりわい)として、従業者一〜三人がこれに該当するとして

いる。しかし、この零細業者の従業者規模にかんしては対象時期の相違等もあり、種々の規定がなされている。[15]

つぎに、中小企業の上限、すなわち、中小企業と非独占大企業との間の境について山口氏は、資本の社会的調達が可能か否か、銀行との結合が強いか否かをさしあたりの基準とするとされる。そして、株式市場に上場出来る資本を一応の指標とするとされ、資本金一億円をその境としておられる。[16] だがより基本的に規定されるばあいは、独占資本による収奪を他資本に転嫁しうる程度を規準とするとされる。すなわち、独占資本からの収奪をほとんど他の資本に転嫁しうる資本を非独占資本とされ、部分的にしか転嫁しえない資本を中小企業だとされる。以上が、山口氏による中小企業、零細経営等の規模規定[註]である。

（註）東京都経済局による、東京都における中小企業の実態調査（一九七〇年）では従業者規模一～四人の二六七企業のうち、一次下請企業は二六・二％、二次下請企業は三六・〇％、三次下請企業は一三・五％、不明は二四・三％である。不明を除く企業のうち、二次・三次下請の占拠率は六五％強である。一次下請企業数より二次・三次下請企業数が多い。これら企業はより多くの皺寄せを被っているといえよう（東京都労働局・経済局『東京都の中小企業と労働者』三九三ページ、一九七三年）。

さて先のような企業分類にもとづき山口氏は、「零細経営は基本的には自家労働に基礎をおく資本制以前の小商品生産であり、独立自営業であって、その大部分はいわゆる生業的経営にほかならない……

「零細商工業者は、基本的には資本家階級と労働者階級との中間に位する小所有者階級（小ブルジョアジー）に位置づけられるとともに、その大部分は、事実上労働者に近い半プロレタリア層を形成しており、全体として階級構成[註]の上では、勤労市民層を構成する主要な要素となっている」[17]と規定しておられる。

このように山口氏は零細業者は「小商品生産者」であり、基本的には「小所有者階級（小ブルジョアジー）」であ

り、大部分は半プロレタリア層であり、全体として勤労市民層であると規定しておられる。

（註）山口氏はこのように、零細業者の大部分は半プロレタリア層を形成しているとされる。しかし、その指標は明らかではない。尚、レーニンは「階級と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその地位が、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され成文化されている）が、社会的労働組織のなかでの役割が、したがって、彼らが自由にしうる社会的富の分け前をうけとる方法と分け前の大きさが、他とちがう人々の大きな集団である。階級とは、一定の社会経済制度のなかで占めるその地位がちがうことによって、そのうちの一方が他方の労働をわがものにすることができるような、人間の集団を言うのである」（大月版『レーニン全集』。第二九巻、四二五ページ）と階級を規定している。そして「マルクスとエンゲルスは、階級の区別をわすれて、生産者だ、人民だ、勤労者一般だと論じる人々と、仮借なくたたかった。マルクスとエンゲルスの著作をいくぶんでも知っているものは、生産者だ、人民だ、勤労者一般だと論じる人々への嘲笑がそれらの著作のすべてを貫いていることを、わすれることはできない。勤労者一般とか、働くもの一般とかは存在せず、存在するのは、生産手段を所有し、その心理全体、生活習慣全体が資本主義的で、それ以外ではありえない小経営主か、それとも、まったくちがった心理をもつ賃銀労働者、資本家と敵対し、対立し、それとたたかっている賃銀労働者かである」（大月版『レーニン全集』第三二巻、二六三ページ）と、小経営主と賃銀労働者との区別に於ける、生産手段の所有・非所有の差の重要性を指摘している。勤労者一般と規定すればこの差が無視されることとなる。

山口氏による小ブルジョアジーの規定は小ブルジョアジーは商品生産者であり、小所有者であり、自家労働中心の経営であるという点においてはレーニンによる小ブルジョアジーの規定と同一であるといえよう。

しかしながら山口氏は、レーニンによってなされた、小ブルジョアジーとブルジョアジーとの間には社会的・経済的同質性があるとする規定は、もはや現段階の日本の社会経済下にある小ブルジョアには、そのままでは適用しえないという主旨の主張をされるのである。まずこの点に関する山口氏の主張をみよう。

山口氏は小ブルジョアジーに関し、レーニンの著作から次の如き引用をされる。

「レーニンはすでに、小所有者である小ブルジョアジーの社会経済上の地位が、「『経営主』と『労働者』とのあいだの過渡的、中間的な地位」（「ナロードニキ主義の経済学的内容」全集一巻、四八二ページ）にあること、「そして、この中間的地位が、必然的に小ブルジョアジーの特殊な性格、その二重性、二重人格性を条件づけ」（「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」全集二巻、二一二ページ）、これが小ブルジョアジーをして「一方ではプロレタリアートと民主主義に心をひかれながら、他方では反動階級に心をひかれ、歴史を阻止しようと試みる」（「ロシア社会民主主義者の任務」全集二巻、三三〇ページ）立場におかせていることを、あきらかにしている。つまり小ブルジョアジーは、自家労働に基礎をおく資本制以前の小商品生産者、独立自営業者として、勤労者でもあり、生産手段の私的所有者でもあるという、二重の側面をもった階級だということから、その社会的・階級的性格も二面性をもっており、勤労者としては労働者階級についてすすみ、私的所有者としては資本家階級と結びつくというのである。

今日においても、零細業者がいぜん、レーニンの指摘したように、階級的に小所有者として、資本家と労働者との間の中間的地位、すなわち搾取者でも被搾取者でもない地位にあることには、変りがない。したがってかれらの社会的・階級的性格は、さきにみた中小企業家の場合とおなじように、二面性をその基本的特徴としている。しかしながら、かつては支配者であるブルジョアジーと小ブルジョアジーとの間に、一定の社会的・経済的同質性をあたえ、反動階級に心をひかせる要素となっていた小ブルジョアジーの中間的・過渡的地位は、現段階の日本の社会経済のもとでは、支配者である米日独占資本と小ブルジョアジーとの間に、なんらの社会的・経済的同質性をあたえるものとなっていないだけでなく、逆に小ブルジョアジーは、極小『経営主』として、独占資本に支配され収奪されるようになり、中間的地位にあること自体が、かれらを労働者階級にいっそう近づけ、米日独占資本にいっそう敵対する立場を

とらせるようになっている。……

こうして零細業者のおかれている中間的地位そのものが、今日では主としてかれらの一方的な被収奪者としての地位をしめすものでしかなくなっており、したがってかれらの社会的・階級的性格における二面性も、米日独占資本の支配と収奪に反対し、プロレタリアートとも手を結んでたたかうという、進歩的側面がその主要な側面となっているのである[18]」とされるのである。

さらに山口氏は「都市においては、零細業者が小ブルジョアジー、半プロレタリア層の基本的な構成要素として、労働者階級の同盟軍の主要な部分となっている。かれらの基本的な要求は二つにわかれており、一つは安定した仕事に定着して貧困から解放されたいという要求で、これは半プロレタリアートを形成する零細業者の大部分の要求である。他の一つは、営業をまもり、繁栄させたいという要求で、これは自分の営業に希望をもっている層の要求であるが、これらはいづれも、米日独占資本の支配のもとでは根本的には解決されない要求であって、ここに零細業者を全体として統一戦線に結集しうる客観的根拠がある[19]」としておられる。

山口氏は以上の如き規定を小ブルジョアジーに与えた後、次の如く言われる。

「半プロレタリア、小ブルジョアジーは、基本的に信頼のできる、そして反帝・反独占の民主主義革命全体を通じて、一貫して持続的に同盟関係を結ぶことのできる同盟軍である[20]」。

さて、以上の文章に見られる山口氏の主張の特徴点のいくつかを山口氏が氏の主張の出発点にしておられるレーニンの主張と対比し検討しよう。

まず山口氏は、今日の小ブルジョアジーもレーニンの規定の通り二面性は有している。しかし、小ブルジョアジー

と米日独占資本との間にはもはや社会的経済的同質性はないとしておられる。

次に山口氏は、小ブルジョアジーは極小「経営主」としても支配され収奪されるようになり、零細業者は一方的な被収奪者としての地位におかれたとしておられる。

第三に、零細業者の二面性のうち、プロレタリアートと手を結んでたたかう進歩的側面が主要な側面となり、零細業者は全体として統一戦線に結集しうるとしておられる。

第四に、零細業者は「反帝・反独占の民主主義革命」（尚、革命の段階・性格規定は本稿の課題外である）全体を通じて、一貫して持続的なプロレタリアートの同盟軍であるとしておられる。

そして最後に、このような主張をなした背景として、小ブルジョアジーがその下に存在する、「今日」ないしは、「現段階」の「かって」と対比しての変化を強調しておられる点があげられる。

以上の諸点に関連して、順を追って検討していこう。

まず、小ブルジョアジーとブルジョアジー（山口氏は「米日独占資本」としておられる。しかし、「米日」の「米」を除いて使用して居られる個所もある。差当り一般的に「独占資本」のみを対象としておられるものとして考察する）との間の社会的・経済的同質性の有無について考察しよう。山口氏はレーニンによる小ブルジョアジーの規定を基準として、「今日」ないしは「現段階」の小ブルジョアジーについて、ブルジョアジーとの同質性の喪失を主張しておられるのであるから、ここにおいても先ずレーニンによって述べられている同質性の内容から考察しよう。レーニンは社会的・経済的同質性について、「勤労農民には、大農業地主と**共通するあるものが**、なにかしらが、a／n がある」[21]（傍点、ゴチック―原文、以下同）といっている。このばあい勤労農民とは小ブルジョアジーである。すな

わち、レーニンは、小ブルジョアジーと地主、ブルジョアジーとの社会的・経済的同質性の存在を示唆している。

では小ブルジョアジーとブルジョアジーとの間の共通性をレーニンはどのように考えていたのであろうか。

レーニンは、「小農耕者は、資本主義のもとでは——好むとこのまないとにかかわらず、意識するとしないとにかかわらず——商品生産者となる。しかもこの変化のうちにこそ問題の全核心があるのだ。小農耕者がまだ賃銀労働者を搾取していないときでも、この変化だけで、やはり彼はプロレタリアートの対立者になり、小ブルジョアとなる。彼は自分の生産物を売るが、プロレタリアは自分の労働力を売る。階級としての小農耕者は、農産物価格の上昇を渇望しないわけにはいかないが、このことは、小農耕者が大土地所有者といっしょになって地代の分配にあずかり、地主と提携してその他の社会に対立するということに等しい。小農耕者は、その階級的立場からして、商品生産の発展につれて、不可避的に小地主となる」[22]と述べている。

またレーニンは次のようにも言っている。すなわち、「小生産者は、市場めあての孤立した商品生産の存在ということによって、また人をおしのけて出世し大経営主となるチャンスをもつということによって、ブルジョアジーと融合している」[23]と。

以上の如くレーニンは、具体的に、商品経済下での、小農耕者（小ブルジョアジー）と大土地所有者（ブルジョアジー）との共通点、小農耕者（小ブルジョアジー）のプロレタリアートとの相違点を指摘している。ここで述べられている内容、すなわち、小ブルジョアジーは私的所有を前提として生産物を売る。この点において小ブルジョアジーは労働力＝商品の販売者である労働者とは相違する。それのみならず生産物価格の上昇によって利益を得る点において、労働者と対立すると述べている。これは小ブルジョアジーのブルジョアジーとの同質性、及び小ブルジョアジー

のプロレタリアートとの相違性における重要点である。

山口氏は既に引用した如く、「かつては支配者であるブルジョアジーと小ブルジョアジーとの間に、一定の社会的・経済的同質性をあたえ、反動階級に心をひかせる要素となっていた小ブルジョアジーの中間的・過渡的地位……」とされていた。この「かつて」とは山口氏の文章における限りでは「現段階の日本」との対応において使用されているのであり、産業資本主義時代を意味するのもでないことは明らかである。「支配者である米日独占資本」と「米」を強調しておられる点からも（また「反帝・反独占の民主主義革命」ということを強調しておられる点からも）、「かつて」と「現段階」とを区分する時期を、第二次世界大戦での敗戦（もしくはこれに伴うアメリカ帝国主義による日本支配の確定）においておられるように思える。もちろん山口氏の主張は、レーニンによる小ブルジョアジーの規定に対比してなされているのであり、この「かつて」にはレーニンの時期が直接の対象として含まれていることはいうまでもなかろう。しかし既に見た如くレーニンは、小ブルジョアジーのブルジョアジーとの基本的な共通点は、生産手段を所有し生産物を販売する点にあるとしていたのである。この基本的共通点は現在の小ブルジョアジーとブルジョアジーとの間にも存在する。すなわち、レーニンの主張していた小ブルジョアジーとブルジョアジーとの最も重要な共通性は、山口氏による共通性の存在の否定にもかかわらず、今日においてもなお存在するといえよう。

しかし山口氏の文意よりすると、山口氏は、小ブルジョアジーもブルジョアジーも共に生産手段を所有し、生産物を販売するにしても、小ブルジョアジーには「かつて」は「現段階」におけるよりも発展の機会が多かった。従って、「かつて」は両者に「一定の社会的・経済的同質性」が存在していたと言えるのに反して、「現段階」においては小ブルジョアジーには発展の機会は無く、両者の間には「なんらの社会的・経済的同質性」も存在していないとしか言

えない、と主張して居られるように思える。この点に関しては、山口氏の主張の特徴点として第二番目にあげた、小ブルジョアジーは「現段階」において、「一方的な被収奪者」となったとされる点との関連において考察しよう。

さて、山口氏は、小ブルジョアジーは「極小『経営主』としても一方的な被収奪者」となったとされる。ここで山口氏が「経営主」として「も」と言われるのは、かつての小ブルジョアジーは、やむなく労働力を売ることによって搾取されることはあっても、経営主・商品生産者としては、一方的に収奪されることはなかったという意味であろうか。

この点に関してもレーニンとの対比で述べておられるのであるから、レーニンの著作からみよう。

まずレーニンは商業資本、高利貸資本によって小経営者が支配され収奪されることについて述べている。商業資本や高利貸資本は生産者を賃労働者に変えることなしに、労働を自己に従属させ、産業資本が労働者からとりあげるにおとらない程度の剰余価値を生産者から奪っているとしている。[24] また零落しつつある農民（小経営）が自分の経営にかじりついている間は、資本は農民（小経営）に依然として古い技術的に不合理な基礎のうえで経営をいとなませながら、彼等を搾取し、彼等の労働の生産物の購買を搾取の基礎とすると指摘し、[25] また商業資本や高利貸資本による支配の特徴の一つは、資本への労働の従属は幾千もの中世的諸関係のかけらによって隠弊され、[26] 小ブルジョアジーは反民主主義的な特権によって苦しめられていることにあると指摘している。また金融資本による収奪については、「有産者のあらゆる層が金融資本に従属すること」[27] が生じ、「あきらかに資本主義的に組織されていない生産も、すなわち、小手工業者、農民、植民地の小綿花生産者等々も、銀行への、一般に金融資本への従属に陥っている」[28] としている。さらに、独占資本主義の国家独占資本主義への移行に伴い、生産と分配とにたいする社会的統制が幾多の国で実施され、「不可避的に勤労大衆の搾取の強化、圧制の強化、搾取者にたいする反抗の困難の増大、反動と軍事的専制

の強化を伴い、それとともに、不可避的に、住民中のすべての層を犠牲として大資本家の利潤を信じられないほどに増大させ、幾十億の公債利子の支払という資本家への貢物によって、幾十年ものあいだ勤労大衆を債務奴隷とする」[29]といっている。

以上の如くレーニンは、小ブルジョアジーが、商業資本や高利貸資本の下ではもちろん、金融資本の下でも収奪され、また国家独占資本主義の下においても他の諸階級と共に債務奴隷として収奪されていることを指摘しているのである。

また山口氏は、半プロレタリアートを形成する零細業者の要求は仕事の安定と貧困からの解放にあり、零細業者上層の要求は営業を繁栄さすことにある。しかし、今日の米日独占資本の支配下では、これらは共に根本的には解決されえない要求であるとしておられた。この規定も氏の「現段階」を特徴づけるものである。

レーニンも、小ブルジョアジーは「資本の圧迫から自己を解放し、小所有者としての地位を強化しようとのぞんでいる。このような任務は、ことの本質から言って解決できない」[30]としている。たしかにレーニンは、小ブルジョアジーは、「大経営主になるというチャンスをもつということによって、ブルジョアジーと融合している」と、小ブルジョアジーが大経営主になるチャンスのあることを述べていた。しかしそのチャンスは極めて稀であり、小経営者百人中、あくせくと苦労し、骨を折って、資本家たりうるのは最上のばあいでも一人のみだとし、そのブルジョアジーへの上昇のほぼ不可能[31]であること指摘していた。

このようにレーニンは、小ブルジョアジーが資本家になりうるチャンスの非常に少いことを前提としてなお、小ブルジョアジーとブルジョアジーとの間には社会的・経済的同質性のあることを述べていたのである。すでにみたごと

く、レーニンはこの社会的・経済的同質性の最も基本的な点を生産手段を所有し、生産物を商品として販売するという点においていたのである。

以上の如く、小ブルジョアジーの「安定した仕事に定着して貧困から解放されたいという要求」も「営業をまもり繁栄させたいという要求」も、ともに「米日独占資本」の支配する以前から解決の困難な、または「本質から言って解決できない」要求であったと言えよう。

その収奪機構に差はあるにしろ、小ブルジョアジーは「極小『経営主』としても」、「現段階」に移行する以前から基本的には「一方的な被収奪者としての地位」にあったといえよう。

次に山口氏が、零細業者は一方的な被収奪者としての地位におかれており、その二面性のうち「米日独占資本の支配と収奪に反対し、プロレタリアートとも手を結んでたたかうという、進歩的側面がその主要な側面となっている」とし、また全体として統一戦線に結果しうるとしておられる点につき考察しよう。

山口氏が小ブルジョアジーの進歩的側面が主要な側面となっていると規定される理由は、零細業者が一方的な被収奪者としての地位におかれているという認識にある。この上にたって山口氏はさらに、小ブルジョアジーの基本的要求は「米日独占資本の支配のもとでは根本的には解決されない要求であって、ここに零細業者を全体として統一戦線に結集しうる客観的根拠がある」としておられる。

既にみたごとく小ブルジョアジーが、一方的な被収奪者としての地位におかれたのは「現段階」への移行以前からであったと言える。従って、小ブルジョアジーがこのような地位におかれることが、この階級が統一戦線へ結集する「客観的根拠」の一つであるとしても、「現段階」において始めてこの「客観的根拠」が形成されたとは言えない。

零細業者が収奪下におかれることは、零細業者がプロレタリアートと団結し、統一戦線に結集する為の必要な条件の一つであるにしろ、それのみで零細業者が進歩的となり、プロレタリアートと全体として団結し、統一戦線に結集する客観的条件が形成されたと言いうるであろうか。被収奪即進歩的側面の主要側面化・小ブルジョアジーの全体としての統一戦線への結集の条件形成とは規定しえないのではなかろうか。その要因のいくつかを次に検討しよう。

先ず、零細業者はレーニンの言う如く、生産諸条件そのものによって分断され孤立化し、特定の搾取者と結合しているために、プロレタリア以下の生活水準に圧下されても、搾取と抑圧の階級的性格を理解しえず、基本的には反動化する傾向すらあることが指摘されねばならない。[32] またたとえ、搾取と抑圧の階級的性格を理解したばあいでも、零細業者は、生産諸条件に規定され、自らの組織を作ることは困難であり、自らの私的所有（生産手段）と自らの腕に信頼をよせる以外に途は無いと思いがちである。被収奪の地位におかれていながらも、小ブルジョアジーが反動化した例は多くある。零細業者が相互に競争していることはその要因の一つとして数えられる。

零細業者は商品生産者として、相互に激しい競争を行っている小ブルジョアジーである。山口氏の言われるとおりに零細業者が進歩的となり全体として統一戦線に結集する為には、この零細業者相互間の矛盾と零細業者と「米日独占資本」との矛盾、この二つの矛盾のうち後者が前者を大きく規定する地位を占め、しかもそのことを小ブルジョアジーが正しく認識し、且、プロレタリアートが信頼されること等が必要とされる。レーニンは小ブルジョアジー相互間の矛盾につき次のように述べている。

「他人の消費を予定した個々の生産者の生産物は、貨幣の形態をとることによって、すなわち質的にも量的にもあらかじめ社会的計算をうけることによって、はじめて消費者の手もとにとどき、生産者にたいして、他の社会的生産

物を受けとる権利をあたえることができる。ところで、この計算は生産者の背後で、市場的変動を媒介としておこなわれる。生産者には知ることのできない、生産者から独立したこれらの市場的変動は、生産者のあいだの不平等を生みださないではおかないし、一部のものを零落させ、他のものの手に貨幣＝社会的労働の生産物をあたえることによって、この不平等を強めないではおかない。貨幣の所有者、買占人の威力の原因も、このことから明らかとなる。すなわち、その原因とは、その日ぐらしのクスターリたちのあいだで、もっとも大きい一週間ぐらしのものだけが、貨幣、すなわち以前の社会的労働の生産物をもっており、そしてこの貨幣が、彼の手のなかで資本に、すなわち他のクスターリの剰余生産物を取得する手段になる、ということになる」[33]。そして、「競争、経済的自立のための闘争、土地の横奪（買取りと借地）、少数者の手への生産の集中、プロレタリアートの隊列への多数者の押出し、商業資本と雇農の雇用とによる少数者の側からのプロレタリアートの搾取、……資本主義的構造に特有の、この矛盾した形態……闘争や利害の不一致……ある者にとってのプラスと他のものにとってのマイナス」[34]という「どんな商品経済にもどんな資本主義にも固有な、あらゆる矛盾」[35]は零細業者間にも存在する。「貧困によっておしつぶされている多数のクスターリのなかから抜けでるためには、この商品的＝資本主義的関係の基礎のうえでは、『豊かさ』を他人からうばいとり、経済闘争に参加して、小営業者の大衆をさらにいっそうしろにおしのけ、みずから小ブルジョアに転化しなければならないのである。極貧と、生活水準のnec plus ultra〔極限〕までの低下か、それとも（少数者にとって）他人の犠牲による自己の（絶対的には非常にわずかな）幸福の建設か――ここに、商品生産が小生産者のまえに提起しているディレンマがある」[36]。このように「小ブルジョア的所有は細分されている。彼らのうち、多くの財産をもっている者は、すくない財産しかもたないものの敵である」[37]のである。

以上の諸引用文よりも明らかに、小ブルジョアジーである零細業者相互間には激しい競争がある。ある者にとってのプラスは他の者にとってのマイナスという状態がある。これは商品生産社会、資本制社会においては、不可避なことである。このような諸条件の故に零細業者の団結は困難であり、また独占資本の収奪下での零細業者間の競争は更に激しい。

このように社会的・経済的条件は、小ブルジョアジーを相互に近づけず、反撥させ切りはなし、幾百万という個々別々の小経営主にしてしまうのである。[38] 商品貨幣機構に規定された相互矛盾によって、団結の条件が少く、自主的に全体として、階級として闘争する能力を持っていないのが一般的傾向である。[39]

以上の如く小ブルジョアジーは、競争裡で組織的に相互に団結することは困難であり、労働者との団結も困難な階級である。労働者との団結が、下請から排除される要因となったり、競争諸条件の悪化をもたらす要因となったりする場合は尚更そうである。

このような相互矛盾を越えてなお、小ブルジョアジーが労働者と団結し、全体として統一戦線に結集する場合は、一般的には、単に一方的な被収奪者としての地位におかれたということのみの場合ではなく、後に見る如く、その他の諸条件が形成され、それらの諸条件が零細業者相互間の矛盾をも大きく規定する場合が多いと思える。単なる収奪ではなく、その形態・程度等の検討が、小ブルジョアジーの動向を考えるばあい重要と思える。

さらにレーニンは次のことを指摘している。小ブルジョアジーは収奪されている存在であるにもかかわらず、自己の私的所有と商品生産者としての地位に災いされて、その事実を容易に把握することはできないということである。この自己の苦悩の根源への不充分な認識は、のちに見る小ブルジョアジーの動揺性と相互促進関係にある。すなわ

ち、小ブルジョアジーはその実現性がほとんどないにもかかわらず、私的所有を前提とする発展を希望するが故に、したがってブルジョア社会＝経済制度を前提とする発展を希望するが故に、自己の苦しみの根源であるこの社会＝経済制度に正しい批判を下すことが少ない。この制度に苦しみながら完全に露呈された諸矛盾から身をよけ、無邪気で反動的な空想にひたっている。[40]「商業や農業の小ブルジョアジーは、資本を憎み、とりわけ信用を掌握している銀行業者を憎んでいる。だが彼らは、自分の財産は永久に存続するものと信じ、それをふやすことができるとさえ信じている」。[41] また批判をなしうる場合であっても、資本主義の根本的批判はなしえず、生産に根ざしている矛盾を生産から分離させて、単に分配上の問題としてしまう。この故に小ブルジョアジーは自らの困窮の原因を分配の特殊性や政策の誤りによって説明するのである。[42] また国家の真の性格を知らない為に、国家に小生産の支持と発展を歎願したり、[43] 租税の軽減や所有地の増大などの援助方策[註]を期待したりする。[44] しかし、土地不足や高額の支払い、行政管庁の圧制、これらの害悪の指摘は収奪や搾取を説明するものではないし、またこれらの害悪を排除しても労働に対する資本の抑圧に手をつけるものでもない。[45] このような小ブルジョアジーの体制に対する皮層的批判は、小ブルジョアジーの私的所有を前提とする商品生産者としての性格に規定されたものである。このような皮層的批判は、帝国主義に対する批判においても見られる。小ブルジョアジーは「併合を『否認』し、帝国主義を『非難』し、世界的な帝国主義的関連と資本主義的経済機構のわくのなかにとどまりながらも、帝国主義的であることをやめるように、ブルジョアジーに『要求』する」[46] のである。すなわち、帝国主義は資本主義の必然的帰結であり、資本主義体制の場棄なくしてはこれを根本的に排除しえないにもかかわらず、自ら私的所有を前提とする発展を希望しているが故に、資本主義の矛盾を根底から認識することが出来ず、従ってまたこれを、根底から批判することが出来ないのである。

このような、小ブルジョアジーの、その私的所有者としての性格故の、資本主義、帝国主義に対する認識の不充分さは、小ブルジョアジーの労働者との団結、全体としての統一戦線への結集を困難ならしめている一要因である。

（註）レーニンは、マルクス主義者にとって、信用や、土地購入や、技術改良、協同組合、共同耕作等々によって、「人民」を援助するなどということを聞くのは、もはや「がまんできない」ことであるとしている（『レーニン全集』大月版第一巻、三七〇ページ）。

しかし、レーニンは、マルクス主義者は部分的改良を絶対的に否定しない。これらが貧弱であるとはいえ若干の利益と勤労者の状態の若干の改善をもたらすことを否定しない。とくに高利貸資本等の遅れた資本形態の死滅を促進し、それらの近代的形態への転化を促進する。したがって改良的手段は採用すべきである。しかしその場合は、資本主義に対する自己の立場を明確にする。またこの制度の発展↓終末を促進せんとの願望をもって、改良的手段の採用承諾の理由とするとしている（同、第一巻、三九三ページ）。尚、レーニンは、ブルジョア革命との関連に於てではあるが、「いやしくも、資本主義のいっそうの発展以外のものに労働者階級の救済をもとめようという思想は反動的である」（傍点―原文。『レーニン全集』第九巻、三八ページ）としている。このばあい「労働者階級の救済」とは体制の場棄を意味する。部分的改良ではなく、体制の場棄こそが、体制のもたらす矛盾の根本的解決であることは言う迄もない。レーニンは、体制揚棄の条件は体制の発展、すなわち体制に於ける矛盾の激化であるということを主張し、部分的改良の限界と部分的改良を承認する際に必要なマルクス主義者の任務を記しているのである。

さらに、小ブルジョアジーのプロレタリアートとの団結、統一戦線への結集を困難ならしめている次の要因を指摘しておかなければならない。すなわち独占資本は独占利潤を背景として、一時的且少数ではあろうとも労働者を買収し、労働貴族を育成し、これをその他の全労働者と対立させ、また日和見主義を成長さす。この日和見主義は同時に超過利潤によって買収された一部小ブルジョアジーの存在をも示しているのである。[47] 勝利した帝国主義はある数の小ブルジョアジーに金持になる可能性をあたえることもあり、[48] 小ブルジョアジーも資本家と同様に弱小民族に対する暴

力から利潤を引き出すこともあるのである。[49] すなわち、独占資本は独占利潤の一部をもって、また帝国主義的侵略による収奪の一部をもって、小ブルジョアジーの一部を買収するのである。

また官僚機構、軍事機関の発展、強化、完成に伴い「とくに、小ブルジョアジーは、この機関を通じて、いちじるしく大ブルジョアジーのがわへひきつけられ、それに従属した。なぜならこの機関は、農民、小手工業者、商人等の上層に、比較的快適で、平穏で、名誉あるささやかな地位、その保持者を人民のうえに立たせる地位をあたえる」[50] からである。このように、官僚・軍事機構の発展、強化、完成によって、小ブルジョアジー上層は、資本主義体制において、一定の地位を与えられることになる。即ち、小ブルジョアジー上層は、官僚、軍事機構等の体制維持機関や国家権力そのものを通じて、人民のうえに立つ地位を保持することとなる。このようなことも、一般的に被収奪者としての地位におかれながらもなお、小ブルジョアジーが、プロレタリアートと団結し、全体として統一戦線に結集することを困難ならしめている要因の一つを形成している。

さて、山口氏の主張における第四の特徴点として指摘した点、すなわち小ブルジョアジーは「反帝・反独占の民主主義革命」において、首尾一貫した持続的な労働者の同盟軍であるという点をについて検討しよう。

既に見た如く山口氏が、小ブルジョアジーを一貫した持続的同盟軍であると規定した根拠は、小ブルジョアジーが一方的な被収奪者としての地位におかれたとの規定にもとづいていた。しかしそのことは「現段階」に固有のこととは言えなかった。従って「現段階」において小ブルジョアジーが一方的被収奪者としての地位にあるとの故をもって、小ブルジョアジーが「現段階」において一貫した持続的な同盟軍となったと主張しえないことは言うまでもない。

しかし山口氏は、その始点の指標は明確にされてはいないが、この民主主義革命の過程での小ブルジョアジー、零

細業者を対象としておられる。この民主主義革命も世界社会主義革命の一環と言いうる。[51] しかし、国内的には、全私的所有の排除を即時の課題とする革命ではないと言えよう。このことが、小ブルジョアジー、零細業者の動揺性にどのような影響を与えるのであろうか。小ブルジョアジーの首尾一貫性と持続性とを主張しうるのであろうか。

レーニンは「農民は小経営主の階級であるが、ブルジョア革命ではプロレタリアートと『バリケードの同じがわに』立って、『ともに』地主と専制を『撃つ』ことができる。また農民は、資本主義社会のまったく別の階級でありながらも、この革命では、ばあいによってはプロレタリアと『同盟』してすすむことができる」[52] としている。だが「民主主義革命が完全に勝利したのちには、小経営者は不可避的にプロレタリアートに反対する方向に転換するであろう、そして、プロレタリアートと小経営者の共通の敵――資本家、地主、金融ブルジョアジーなどといった――がすっかりほうり出されるのが早ければ早いほど、それだけ早く転換するであろう」と述べている。[53] これはブルジョア民主主義革命の過程における小ブルジョアジーについての主張である。しかしこの主張の要点は、資本主義下の小ブルジョアジーにも、社会主義下のそれにも妥当する。

資本主義の下での、また資本主義から社会主義への過程においての、小ブルジョアジーの動向についてのレーニンの主張を見よう。

レーニンは次のように言っている。「マルクス主義をまなんだことがあり、一九世紀における先進諸国の政治闘争の経験を考慮に入れたいとおもっている社会主義者ならみな、プロレタリアートと資本家階級のあいだを小ブルジョアジーの動揺することは避けられないことを理論的には承知する。これらの動揺の経済的根源は経済科学によって明白に解明されており、この経済科学のかずかずの真理は、……何百万回となく繰りかえされてきた」[54] と。すなわ

ち、レーニンは、小ブルジョアジーの動揺は歴史的にみられたことであり、また科学的にも解明されたこととしている。

小ブルジョアジーの私的所有者、商品生産者としての側面は、彼らの一歩ごとに、「不意の」、「思いがけない」、「偶然の」零落や、滅亡や、こじき、窮民、売笑婦への転落や、餓死をもたらすような[55]、不安定な状態があろうとも、小経営主としての本性に従って生きることを強制する。だが、零落、窮乏、生活の苦しさは、私的所有者、商品生産者としての側面を後退させ、動揺を引きおこす。きょうはブルジョアジーの味方をし、あすはプロレタリアートの味方をする[56]。ブルジョア社会の発展条件がいくらかでも順調に形成されていく（たとえば産業の好況や、土地変革の結果としての国内市場の拡大等々）ならば、「小商品生産者は、社会主義のためにたたかうプロレタリアートにかならず反対する[57]」。このように小ブルジョアジーは私的所有者として、その根を資本主義に下ろし、資本主義の構造そのものの故に動揺するのである。

また、小ブルジョアジーは、「何十年も刻苦して、自分の地位をまもらねばならなかった[58]」。このことにも規定され、私的所有・零細経営喪失への恐怖心は強い[59]。また小ブルジョアジーは抑圧され、零落していくために極端な革命性をもつ場合もある。しかし、プロレタリアートとは異り、忍耐、組織性、規律、確固さにおいて欠ける。このことは理論上も充分確認されている[60]。

このように小ブルジョアジーは動揺する階級であり、また組織的にも訓練されていない階級である。ここにプロレタリアートの役割の重要性が生ずる。レーニンは次のように警告している。「社会民主主義者は、どんなに民主主義的で共和主義的なブルジョアジーや小ブルジョアジーであっても、それにたいするプロレタリアートの社会主義をめ

ざす階級闘争が避けられないことを、けっして、かたときもわすれてはならない[61]」と。

もちろん、レーニンは社会主義革命の後においても、プロレタリアートは、小ブルジョアジーとの闘争を避けることができないとしている。

レーニンは社会主義化の過程においても、小ブルジョアジーがプロレタリアートに敵対することのあることを、ソヴィエト社会主義革命に関連して次の如く述べている。小ブルジョアジーは、大搾取者に敵対意識を持ち、これを零落させる点でプロレタリアートを支持した[62]。しかし、小ブルジョアジーは戦争中に手段をえらばず金をためており[63]、これを元本にして儲けることを計画しており、記帳、社会化、統制等の国家資本主義をおそれる[64]。かくして社会主義建設過程において、小所有、小資本はプロレタリアートの敵となる[65]と。もちろん、小ブルジョアジーの指導的分子が、プロレタリアートの味方となることは階級的見地からみて可能である[66]。しかし、全体として、小ブルジョアジーにはプロレタリア的魂と「経営者」的魂との二つがあり[67]、これは小ブルジョアジーの行動を最後迄規定する。資本主義から共産主義への移行過程においても、搾取者再興の可能性のある場合には小ブルジョアジーはその背後につく可能性がある[68]。この小ブルジョアジーの二重性はプロレタリア独裁下でも存在する[69]。レーニンは資本主義から共産主義への過程において、プロレタリアートの革命的前衛[註]の統一や影響がほんの少しでも弱化すれば、資本家や地主の権力がおよび、所有の復古がおこるであろうとする[70]一方、資本家や地主の駆逐後、プロレタリアートに対抗しうる唯一の階級は小ブルジョアジーであるとしている[71]。なお、レーニンは、大土地所有者、大産業資本家、この二大階級の廃絶は比較的容易であるが、小生産者、小農耕者に対しては別の闘争方法が必要である。小商品生産者は廃絶しなければならないけれど追い出すことはできない、再教育し、仲よく暮していかなければならない[72]としている。この最後の資本

主義的階級、資本主義の最奥の基礎である小所有者、小生産者に対し国家権力を把握しているプロレタリアートは同盟を必要とする。そしてこの同盟は軍事同盟から経済的同盟へと移行しなければならない。

（註）レーニンは、小ブルジョアーの動揺を持ちこたえ、それに対抗することのできるのは、きたえられたプロレタリアートの前衛だけである（『レーニン全集』、第三二巻、三九〇ページ、大月版）。このプロレタリアートの前衛がないかぎり、小ブルジョアジーは、全体的にブルジョアジーと手を結ぶ過渡的な階級であるだろうとし（同、第一巻三九五ページ）、小ブルジョアジーをひきいてすすむためには、自分の敵から完全に「分化」（同、第一巻、三六九ページ）し、完全にそれと対立するにいたった階級であるプロレタリアートの独裁が必要だとしている（同、第二九巻、三九二ページ）。

以上の如く、レーニンは、小ブルジョアジーが私的所有に依拠し、資本主義において不可避的である経済状態の不安定さと貧困化の中で、動揺していく階級であることを主張している。そして「この動揺する階級にたいするわれわれの態度は多大の困難を呈している」[73]としている。この動揺性は資本主義においても見られるのであり、当然、山口氏の言われる「反帝・反独占の民主主義革命」の過程においても見られると言えよう。

（注）山口氏も「現段階」に於ける小ブルジョアジーの二重柱を指摘して居られる箇所がある。氏は、民商・全商連運動の発展に関し、その一要因は、「組織の基礎を零細業者の下層、すなわち半プロレタリア層においていることであり、これによって小ブルジョアジーの二面性にもとづく行動の動揺性を克服する組織的保障をつくりだしていることにある」として居られる（山口、前掲、三二四ページ）。しかし、山口氏の主張の基調は全体として、小ブルジョアジーはプロレタリアートの持続的で一貫した同盟軍であるという点にある。

なお、山口氏はその主張において、「現段階」と「かつて」との差を強調された。また小ブルジョアジーは「米日独占資本」に支配されているとされ、「米」を強調されていた。これは山口氏が「反帝・反独占の民主主義革命」と主張して居られる点と緊密に結合していることはいうまでもない。

他民族による支配、帝国主義による支配が統一戦線に結集する諸階級の範囲を規定する一要因であることは、以下の考察よりも明らかである。しかし日本資本主義の「従属・自立」問題の追求は本稿の課題ではない。ただ「現段階」への移行、及び「米日独占資本」の支配の存在、これらが小ブルジョアジーの相互矛盾、動揺等の阻止要因として如何に作用するかは考察する必要がある。

この点に関連しては迂回的且間接的ではあるけれど、小ブルジョアジーを基本的には「もっとも近い友」[74]と規定した毛沢東の主張を考察しよう。

毛沢東がこのように規定した背景には、中国では封建地主の存在と共に、帝国主義侵略によって資本主義的発展が抑制され阻止されているという認識があった。すなわち一九三五年に毛沢東は、中国に「植民地化の脅威がせまっている」[75]とし、半植民地から植民地への移行の危機を述べている。そして一九三七年には、「日本帝国主義の都市攻略、国土占領、強姦、略奪、放火、虐殺によって、中国人には、亡国の危険が最後のところまできている」[76]と述べている。そして「日本の侵略という状況が中国の階級関係を変え」[77]たとしている。このように国内の階級関係を変化さすが如き条件が、日本の帝国主義的侵略によってもたらされたのである。このことが、中国における諸階級の連合の必要性と可能性とをもたらしたのである。すなわち、毛沢東は「日本帝国主義の武力侵略が国内の階級関係の変化をひきおこしたので、日本帝国主義とたたかうために全民族の各階層を連合させることが必要になり、また可能になった」[78]と言っている。即ち、日本帝国主義の武力侵略が、中国人民の連合をもたらす重要な契機となったのである。

また小生産者の経済的地位は帝国主義とは両立しなかった。すなわち「帝国主義と中国の反革命勢力はかれらに大きな損害をあたえ、かれらのうちの多くのものを失業、破産、または半破産の状態におとしいれてきた。かれらはい

まにも亡国の民になろうとしており、もはや抵抗する以外に活路はない」[79]状態であったのである。

毛沢東が、中国において、小ブルジョア階級を「もっとも近い友」としたのは、このような状態においてであった。そこでは、小ブルジョア相互間の矛盾も、小ブルジョアの動揺もより大きな矛盾によって、その発現を抑制される傾向にあったと言えよう。

このような民族問題の存在は、小ブルジョアジーがファシズムの支持者となることを抑制し、逆に反ファシズム統一戦線への小ブルジョアジーの参加を促進することになる。例えばスペインにおいても「鋭い民族問題の存在がいくつかの工業的に発展した中心で、ファシズムが小ブルジョアジーによる大衆的基盤を築く可能性を制約」していたとされている。[80]

またファシズムの独裁自体も、小ブルジョアジーの労働者との団結、統一戦線への結集を促進した。大衆運動と独裁の基礎を都市および農村の小ブルジョアジーの中においたドイツやイタリアのファシズムとは対比しうる、スペインにおいても、最初は「多くの小ブルジョアジーの代表者たちは、妥協を求めファシズムにたいする公然たる闘争を避けようとつとめた。

しかし、合法政府にたいするファシスト将軍たちの裏切りと公然たる攻撃は、都市の小ブルジョアジーの怒りを爆発させ、ためらいのほとんどを消し去った」[81]のである。そしてこの「攻撃の結果として、小ブルジョアジーを決定的にプロレタリア階級と結束させてしまった」[82]のである。このように、圧制と暴力、ファシズム、それらが、小ブルジョアジーを労働者と団結させたとされる。もちろん当時の「スペイン人民が直面している任務は、ブルジョア民主主義革命の任務」であった。従って小ブルジョアジーの労働者との団結の条件はより多く存在した。この「最も広範な

人民大衆の、最も基本的な利益を保証するブルジョア民主主義革命の諸任務を、スペイン人民はいまや、新しい方法で解決しよう」[83]としたのであった。

このようにファシズムの暴力と恐怖政治を直接的契機として、小ブルジョアジーがその相互矛盾と動揺性を乗り越えて労働者と団結し、反ファシズム統一戦線に結集することは、特に、被支配ないしは半被支配国において多く見られる。[註]被抑圧民族の住民、小ブルジョアジーは、ブルジョアジーよりも、民族解放を支持するプロレタリアートを支持するのである。[84]

ディミトロフも、バルカンにおいて、「大衆にたいするテロによって、反動的、略奪的な政策によって、ブルジョアジーは、これまでその政治的指導にしたがっていた中間層までをも敵にまわしている」[85]とし、テロの下で小ブルジョアジー等がブルジョアジーに反対する方向へ進んでいることを指摘している。

（注）しかし、「ドイツ・ファシズムのように、大衆の前に現われときには、はずかしめられた民族の擁護者の仮面をかぶり、傷つけられた民族感情にうったえる」ばあいもある（『ディミトロフ選集』第二巻、九五ページ）。

以上の中国、スペイン、バルカンの例では、帝国主義的侵略、ファシズム支配、これらを直接的契機として、小ブルジョアジーは労働者と団結して反ファシズム統一戦線に結集したとされている。

ファシズム支配は、金融資本の強さを示すものではなくその弱さを示すものである。金融資本が従来の方法での支配を行う能力を失った時の、ブルジョア民主主義の「公然たるテロ独裁」への交替である。それは国内の諸矛盾の激化の結果であり、従ってまた、プロレタリアートの正しい政策の下で、小ブルジョアジーの労働者との団結の条件が形成されてきた時とも言えよう。経済的矛盾の激化が政治的矛盾の激化として表われ、小ブルジョアジーが反ファシ

ズム統一戦線へと結集したこれらの国々の状況は、諸階級が独占資本の収奪下におかれているとはいえ、「現段階」の日本の状況とは異るといえよう。「現段階」の日本は、毛沢東の言った意味での「亡国」の恐れのある時期とも異る。従ってまた小ブルジョアジーの運動の方向も異るであろう。

ディミトロフは、「労働者階級、農民、小ブルジョアジー、インテリゲンツイアの利益、諸小国民、従属諸国、植民地諸国の利益、文化と科学の利益、平和と民主主義の利益の現在ほど一致し、合流して人類の兇悪な敵ファシズムに反対する全体的な流れをかたちづくった時期を、戦後の政治史上見いだすことは困難である」[86]とし、このことが反ファシズム統一戦線の「現実的基礎」だとしている。

中国、スペイン、バルカン等のおかれていた条件と「現段階」の日本の条件とは基本的に異り、反ファシズム統一戦線と、反独占の統一戦線とも基本的に異る。小ブルジョアジーの社会性格とその運動を考えるばあい、この基本的な相違は重視すべきである。しかしまた、これらの基本的な相違が、小ブルジョアジーの運動の差をそのまま規定するかの如く、小ブルジョアジーを固定的に把握することも許されないであろう。

なお、レーニンは「プレハーノフの第二次綱領草案にたいする意見」において、「われわれは積極的な形では小ブルジョアジーの保守性を指摘することができる（そして、指摘する義務がある）。そして彼らの革命性については、われわれはただ条件的な形でのみ、指摘しなければならない。このような定式化だけが、マルクスの学説の全精神に厳密に合致したものであろう。たとえば、『共産党宣言』は、はっきりとこう言明している。『ブルジョアジーに対立しているすべての階級のなかで、ひとりプロレタリアートだけが、真に革命的な階級である。……小工業者、〔小商人〕、手工業者、農民は……革命的ではなく保守的である。そればかりか彼らは反動的である。……もし彼らが革命

的になるとすれば（「もし」だ！）、それは彼らが、自分らのプロレタリアートへ移行する時がせまっているのを見てのことである。……［そのばあいには彼らは］彼ら自身の立場を捨ててプロレタリアートの立場に立つのである』。

『共産党宣言』の時代以後の半世紀のあいだに事情が本質的に変化したのだ、などと言いたまうな。ほかならぬこの点では、なに一つ変化していないのだ」[87]と言っている。その後八十年余を経過した。レーニンによる小ブルジョアジーに対する規定を修正する事態が「現段階」にあるとすれば、それを明確にすることが必要と思える。山口氏の主張ではなお、レーニンの時代をも含める「かつて」に対比し「現段階」において、小ブルジョアジーの社会的性格を根本的に変えた具体的要因は明白ではないのである。

ディミトロフは一九三五年に、ファシズムに対する闘争においても労働者階級の戦闘的統一が確立してこそ、農民、都市小ブルジョアジー、青年およびインテリゲンツイアにたいするファシズムの影響を麻痺させ、その一部を中立化させ、他の一部を自分の味方につけることができる」ということを第一に主張し、農民と都市の小ブルジョア大衆にたいしては「これらの大衆はあるがままのものとしてとらえるべきであって、われわれが彼らに期待するようなものとしてとらえてはならない。闘争の過程でのみ、彼らはその懐疑と動揺を脱却するであろう。避けることのできない彼らの動揺にたいして辛抱づよい態度をとり、プロレタリアートの政治的援助をあたえるときにはじめて、彼らは革命的な意識と積極性のより高い段階にのぼるであろう」[88]と小ブルジョアジーの動揺性とその動揺性に対するプロレタリアートの正しい対応・政治的援助の必要性を指摘している。

（8）『レーニン全集』、第一巻、四二六ページ、大月書店。
（9）同、第九巻、四六〇ページ。

(10) 同、第一〇巻、二八ページ。
(11) 同、第二八巻、二九五ページ。
(12) 同、第一巻、一六九ページ。
(13) 山口良行「中小企業家・零細業者の運動」(市川弘勝編著『現代日本の中小企業』、三二〇ページ、一九六八年、新評論。
(14) 東京都労働局・経済局『東京都の中小企業と労働者』、三七一ページ、一九七二年。
(15) 加藤誠一「中小企業の定義にかんする理論的諸問題」(『社会労働研究』第一四号(下))。
(16) 山口、前掲、一六ページ。
(17) 同、三一九ページ。
(18) 同、三二五—六ページ。
(19) 同、三四〇ページ。
(20) 同、三三〇ページ。
(21) 『レーニン全集』、第六巻、五六ページ。
(22) 同、第二二巻、一〇三ページ。
(23) 同、第一巻、四一三ページ。
(24) 同、四八五ページ。
(25) 同、五二〇ページ。
(26) 同、五一七ページ。
(27) 同、第二一巻、二二五ページ。
(28) 同、第二六巻、一六〇ページ。
(29) 同、第二四巻、三一八ページ。
(30) 同、第一〇巻、二五四ページ。
(31) 同、第二五巻、二六〇ページ。
(32) 同、第一巻、二七〇ページ。

(33) 同、第一巻、四三八ページ。
(34) 同、第三巻、一六四ページ。
(35) 同。
(36) 同、第二巻、四一二ページ。
(37) 同、第三〇巻、四七二ページ。
(38) 同、第三二巻、二九三ページ。
(39) 同、第二五巻、四三六ページ。
(40) 同、第一巻、四一六ページ。
(41) トレーズ著・坂井信義訳『フランス人民戦線』、六三ページ、一九七六年、国民文庫、大月書店。
(42) 『レーニン全集』、第一巻、四七七ページ。
(43) 同、第一巻、四七五ページ。
(44) 同、四一三ページ。
(45) 同、三〇五ページ。
(46) 同、第二四巻、一八ページ。
(47) 同、第二三巻、一一七ページ。
(48) 同、第三〇巻、七六ページ。
(49) 同、第二四巻、二三四ページ。
(50) 同、第二五巻、四四〇ページ。
(51) 『毛沢東選集』、第二巻、四六九ページ、一九六八年、北京、外交出版社。
(52) 『レーニン全集』、第一五巻、三一九ページ。
(53) 同、第一〇巻、二七〇ページ。
(54) 同、第三〇巻、二六九ページ。
(55) 同、第一五巻、三九六ページ。

(56) 同、第三二巻、三九〇ページ。
(57) 同、第一〇巻、三一九ページ。
(58) 同、第二九巻、一九八ページ。
(59) 同、第一巻、四六一ページ。
(60) 同、第三一巻、一六ページ。第二巻、八五ページ。
(61) 同、第九巻、七九ページ。
(62) 同、第二七巻、二九五ページ。
(63) 同、三四〇ページ。
(64) 同、二九七、三〇一、三〇五、三〇六ページ。
(65) 同、二九五ページ。
(66) 同、二八四ページ。
(67) 同、第二〇巻、二二三ページ。
(68) 同、第二八巻、二六九ページ。
(69) 同、第三〇巻、一〇三ページ。
(70) 同、第三二巻、二五九ページ。
(71) 同、二九三ページ。
(72) 同、第三一巻、二九ページ。
(73) 同、第二九巻、一九八ページ。
(74) 『毛沢東集』、第一巻、一二ページ、一九六八年、外文出版社。
(75) 同、第一巻、二一一ページ。
(76) 同、第二巻、四八ページ。
(77) 同、第一巻、二二九ページ。
(78) 同、第二巻、三九ページ。

(79) 同、第一巻、二一〇ページ。
(80) トリアッティ著、山崎　功訳『統一戦線の諸問題』、三六ページ、一九七五年、国民文庫、大月書店。
(81) 同、五五ページ。
(82) 同、四八ページ。
(83) 同、四九ページ。
(84) 『レーニン全集』、第一巻、四一三ページ。
(85) 『ディミトロフ選集』、第一巻、二三四ページ。ディミトロフ選集編集委員会編訳、一九七二年、大月書店。
(86) 同、第二巻、二七四ページ。
(87) 『レーニン全集』、第六巻、三六ページ。
(88) 『ディミトロフ選集』、第二巻、一〇四ページ。

（一九八二・九・三〇。未完）